

2021年度 入学試験問題

国語 C

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は50分間です。
3. 問題は□～四までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さてそこで、まず注目されるのは、古くから日本人が売買という商行為を「うる」と「かう」ということばで認識してきたことだった。当然、売り手は「得る」つまり得をする。ところが一方の買い手は「交う」すなわち、品物と金を同価値と認めて交換すると考えた。この単純な商行為が基本となって、利益による富裕者が誕生する。

いや、買い手もその辺りの損はよく承知しているが、商品を自分で作り出すことができない代わりに、その分の注₁付加価値を上乗せして物を金と交換するのであるか。これが生産者と消費者の関係である。

しかし、① つねにこうであれば「経世済民」(経済が世のため人のためになる)という経済は成り立たない。だから、経済の鉄則は相互に売り手となること、売り物の付加価値を評価することのはずだ。

このルールに反して、つねに買い手、つまり消費者に終始すれば、その人はいつまでも貧困を脱することはできない。要するに脱貧困の基本は、何らかの生産者になることである。

一方、売り手にも問題がある。「得る」こととなつた注₂プラス_αの価値を「② 儲け」と呼ぶ。

これこそ交換に成功した利得で、才覚もあり、手腕も優れ、また時と所にも恵まれた結果で、みごととしか言いようがない。

が、さてこの利得を「もうけ」と呼ぶ正体は何か。

辞書を見れば誰でもわかるとおり、「もうける」には「あらかじめ準備をすること、利得を得ること」と書いてある。そこで大事なのは、この二つが別々の場合を指すのではなく、本来このことばが二つの全部を意味することである。

何と、利益を得るとは、次に向けて先立って準備をすることだと考え

たのが、日本人だったのである。それと気づかずに、高値で売れる旨みに酔いしれて、売り手がすべてを自分の所得と考え、賭け事などに使ってしまう——つまり一〇〇パーセント消費者になると、もう_{注3}原資がないから生産者から脱落する。

a あげくの果てには、日本は福祉政策に欠ける！
政治家がよくない！

と、他人事として喚くことになるだろう。

そんな愚かしいことを、日本人の祖先は少しも教えてはいないのである。「うる」と「かう」の差から資金ができた、さあ次つぎと生産者となつて、安穏な生活をしなさいと言ってくれるご先祖さまに、こんな_{注4}体たらくでは、申しわけない。

病気についても、薬品の力も借りながら、みずから健康を保つ自己努力が必要であった。同じように貧困についても、福祉制度その他の税金という善意の国民の力ばかりに頼らず、みずから生産者になる自己努力が必要であろう。

さあ、いまからすぐ、儲けようではないか。

いつまでも消費者でいては、生活が豊かにならない。だから自分を生産者に変えよう。

じつはこの「変える」こと——何にせよ「交換」こそが人生のもつとも大切なキーワードだ。

この問題にいち早く気づいた人に、大阪の商人学者・山片蟠桃(一七四八〜一八二一)がいる。彼は注₅難波の注₆大店の番頭だったので、同じ発音の注₇雅号を名乗った。そんな実践者だから、発言には重みがある。こんなことを言う。

地方で木を伐つて難波に出すと、難波ではそれを使って_{注8}箆笥や長持を

作って高く売る。地方の者はそれを買って帰る。だからいつも田舎は貧しく、都市は豊かなのだ、と。

ここでその通りだと思ってしまうてはいけない。

木だって生きてきて成長したまんま売り物になったのではないだろう。何年も育てた後で売るので、工夫して商品にするのがよい。

「田舎」の民だって、生産者であることを自覚する必要がある。

だから「貧しい田舎」を当たり前と思いつ込んでいけることがいけない、この注。因循を変えなさい、とことばをつく。

③ 悪い習慣に気づき、豊かな田舎を実現しよう。「民は邦の本」なのだから。

そこで蟠桃は「変えよ」を連発する。

一遍で変わらなければ二度変えよ。二遍して変わらなければ三変すべし、と。

少なくとも、これほど「変える」ことを唯一の条件とした人を、わたしは外に知らない。

わたしはこのことから「不可能は可能の第一歩である」という造語を思いついたほどだ。右の場合は二度不可能だったのに、三度目は可能だったということである。

それでは、どうすれば変えられるのか。

何か特效薬があるのかといえば、④ その答えも、予想に反しながら、核心をついている。まず聖人・賢人の教えをよく勉強して、自分からその実践を心がけなさい、と言う。

このような自分であってこそ初めて、どのようにやり方を変えればよいかも、探りあてられるはずだ。

つまり、蟠桃の実践のすすめは、まず人間としての修養が必要で、そ

のうえでよい手段も自然と出てくる、という考え方である。

とかく世間では、方法しか教えてくれない。やり方を知っていれば何でもできる、と考えがちだが、蟠桃は真つ向から、⑤ それを否定する。

なるほど、素材のうえに工夫を凝らし、技術をもって品質を向上させるのは自分なのだから、上等な品物とは、素材のうえに作り手の人間力が加わったものだ。

だったら儲けとは人間力によるものに他ならない。人間力のある自分に自分を変えることしかない。

まずは人間を磨くこと。そのうえで因循をたち切つて、決定的に現実を変更し続けること、それが豊かになる秘訣なのだ。山片蟠桃は説いたのである。

山林の民も木材の生産者であり、注。従前の都市でしかなかった加工の一部にも生産者として加わること、その目標に向かってどんどん自分の変更を重ねていくこと。

このすべてに注。聖賢の道に従う前提がある。⑥ こんな注。心得があれば、必ずや「邦の本」である民も豊かになるという考えを、もう一度味わってみよう。

もとより、山の民は一例にすぎない。どんな仕事でも原理は同じ、ほんのささやかなことでもいい、すべてに X 者になることが豊かな生活者となる秘訣なのである。

【中西進 『令しく平和に生きるために』】

注1 付加価値：商品などに付け加えられた独自の価値。

注2 プラスα：いくらかを足したもの。

注3 原資…資金源。お金もうけのもとになるお金。

注4 体たらく…情けないありさま。

注5 難波…大阪の中央部にぎわっていた都市。

注6 大店の番頭…大きな店の使用人で、もつとも地位が高い人。

注7 雅号…本名のほかにつける風流な名前。

注8 因循…古い習慣や方法にしたがって、一向に改めようとしないこと。

注9 従前…以前。これまで。

注10 聖賢の道…聖人や賢人の教え

注11 心得…心がまえ。心がけ。

問一 ……線 a「あげくの果てには」の意味として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア だから イ 結局は ウ その一方で エ その理由は

問二 ……線①「つねにこうであれば」という経済は成り立たない」のはなぜだと考えられますか。その理由を説明した次の文の□に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数でぬき出して答えなさい。

* □(四字)を得る □(二字)な人と、 □(二字)な

人が生じてしまうから。

問三 ……線②「儲け」とありますが、日本人の「儲け」についての考え方を明確に表した二十五字以内の部分本文からぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四 ……線③「悪い習慣」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 地方が貧しいのは当然だと思ひこみ、工夫して商品を生み出そうとしないこと。

イ 都市が豊かなのは当然だと思ひこみ、地方の住民である自分も都市で利益を得ること。

ウ 地方が貧しいのは当然だと思ひこみ、都市の商人に少しでも高く売ろうとすること。

エ 都市が豊かなのは当然だと思ひこみ、都市で作られた商品を地方でさらに高額で売ること。

問五 ……線④「その答えも、予想に反しながら、核心をついている」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 「どうすれば変えられるのか」についての筆者の答えは、蟠桃が思い描いたものとは違っているが、本質的な解決方法を示している。

イ 「どうすれば変えられるのか」についての蟠桃の答えは、筆者の考えとは違うように思われたが、根本的には同じであることが分かった。

ウ 「どうすれば変えられるのか」についての筆者の答えは、蟠桃の考えと表面的には異なっているように思われるが、根本的には同じである。

エ 「どうすれば変えられるのか」についての蟠桃の答えは、一般的に人々が思い浮かべるものとは違っているが、物事の本質をとらえている。

問六 —— 線⑤「それ」の指し示す内容を、本文中の言葉を用いて二十五字以内で説明しなさい。

問七 —— 線⑥「こんな心得」とは、どのような「心得」ですか。五十字以内で説明しなさい。

問八 [X]に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

- ア 理解 イ 共感 ウ 創造 エ 発言

問九 本文の説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 筆者は江戸時代の商人学者のことは引用して、現在でも経済活動を都市に任せきりにしている地方の様子を批判している。

イ 筆者は日本に昔からあったことばに注目して、そこにこめられた知恵を忘れてしまった現代の日本人のあり方を批判している。

ウ 筆者は日本の売買を表すことばに注目して、現在の日本人がほかの世界にはない優れた商取引を行っていることを明らかにしている。

エ 筆者は日本の経済に関することばを検証して、江戸時代まで発達し続けた経済思想がそれ以降は衰えてしまったことを明らかにしている。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大学生の青山霜介は、日本を代表する水墨画家の篠田湖山に気に入られて、内弟子となる。

「久しぶりだね、青山君」

相好を崩した湖山先生は相変わらず上機嫌だったが、少し痩せて衰えて見えた。

「先生もお元気そうで何よりです」

と答えると、おおとかああとか老人特有のあいまいな感嘆詞を呟いて、僕に座るように言った。僕はその声が好きだった。そのとき、相変わらぬこの和やかな空気を僕はどれほど求めていたかを思い知った。

「では久々に見せてもらおうかな。少し時間が空いたね」

と言いながら、僕に道具を勧めると湖山先生はゆったりとした動作で、顎鬚を撫でた。いつもどおり墨をすり、道具を整え、筆に水を浸けて一気に注¹春蘭を描こうとすると、**A**穂先が震えていることに気づいた。気取られまいとすぐに筆から手を離れたけれど、湖山先生の目をごまかすことはできなかつたに違いない。湖山先生はさつきよりも優しく微笑んでいた。

以前はただ単に描くだけでよかった。だが今はほかの誰でもなく、この人に認められたいという想いが強くある。僕が見てきたものを伝えたかと思っていた。

筆を持ちなおし、**B**蘭を描いた。手順はいつもと同じだ。**C**手

は無意識に動いていた。葉を描き、花を描き、点を打ったとき、たった一枚しか描いていないのに全速力で走ったときのような疲労と走り終え

た後の注²虚脱感を感じた。湖山先生は皺皺の細い目で絵を見て、それから僕を見なおし、また絵に視線を戻した。湖山先生は顎髭を撫で続けている。何を考えているのか、まったく分からない。そのまましばらく時間が過ぎた。そのしばらくの間、僕の心臓は描き終わったのに、①さらに強く脈打っていた。湖山先生の目をまともに見ることができない。

「青山君」

僕は、はい、と答えながら視線を上げた。湖山先生は笑っていた。

「言うことがないよ。すばらしい」

「ありがとうございます」

僕はそのまま机で頭を打ちつけてしまいたいそうなほど深くお辞儀した。

「よくこの短期間にこれほどまで蘭を極めたね。正直に私は驚いたよ」

「あ、ありがとうございます。恐縮です」

「よほど、必死に描いていたんだね。もともとの才能というのもある

のだろうけれど、これほど上達のはやい人は一人も知らないよ。あの

注³齊藤君ですら、もう少し時間がかかったものだ。よくがんばったね」

僕は何も言えなくなって頭を下げた。感極まるというのは、まさしく

このことなのだろう。喜びで呼吸が乱れた。自分の中に力が生まれてき

たのが分かった。僕は大きく息を吸い込んだ。僕もやっと笑っていた。

「いい顔になった。そして、いい絵師になったね」

僕は何も言えずに頭を下げ続けた。うんうんと湖山先生はうなずいた。

「美しい線を引くようになったね。本物の春蘭は見たかい？」

「ええ、見ました。描いているものとまるで違っていて戸惑ったけれど、

でも実物を見てから少し②気が楽になりました」

「楽に？」

「ええ、あのこんなことを言うと怒られそうなのですが、本当はどう描

いてもいいんじゃないか、って思ってた」

「なるほど」

「それから、何気ない草や木を、水墨はどうしてこんなにも美しいものに変えることができるのだろうって思いました。それで本当はもつといるんなものが美しいのではないかって思いました。いつも何気なく見ているものが実はとても美しいもので、僕らの意識がただ単にそれを捉えられないだけじゃないかって思ってた……。絵を描き始めてから僕はようやく何かを見ることができるようになったんで思いました」

湖山先生は顎髭を撫でるのをやめて、じっと話を聞いてくれた。

話し終わると少しだけ目を細めた。そして、立ち上がり、僕と席を替わると、いつものようなさりげなくも素早い動きで絵を描き始めた。一つ

は竹、もう一つは梅だった。どちらも湖山先生が描くのを見るのは初めての技法だったが、これまで僕が見てきたものとは別物だった。湖山先

生の筆はやはり魔法のようだと感じざるを得なかった。

絵の中の何処かにリアリティがあり美しいとか、実物の特徴を丁寧に

捉えているとか、線が際立った表現をしているとかではない。むしろそ

れとは逆で、お手本の中の絵はどれも特に何も主張してはいない。手を

抜いて、気楽に描いているのがよく分かる。サラサラと描いていて手数

もやたらと少ない。だが、そうした特徴のなさに反比例して、美しいの

だ。

これまで水墨のさまざまな表現を見てきて、それぞれの絵師の技法上

の特徴と画面上の美の要素を探ることはできていた。いつだって、その

絵の中で何を見れば良いのか、はつきりと分かっていた。だが、湖山先

生の技法を改めて眺めると、目の前で描かれていても、どれだけ完成ま

での瞬間を見逃さずに見ていても、何が美しいのか、まるで分からない。

何が美しいのか、まるで分からないのに、何かが圧倒的に美しいのだということだけを、理解できないまま感じてしまう。それは意識というよりも、本能的な感覚に近い。

僕は絵を眺めながら、何かが消えて溶けていってしまう感覚に襲われた。それは切なさでもあり、充足でもあった。ひたすらに何かが消えて去っていきながら、それでいて、何かが生まれ続けている感覚だ。大きな滝や、巨大な山の前に立ったときのような、侵しがたい気持ちにも近く、目を奪われながら離せないような震えだった。絵は二つとも何処までも素朴で単純なものだった。

絵が乾いていく瞬間、墨色の竹は青々と変化しそのまま緑に見え、梅の枝は風雪に耐える力強さをたたえて、花はただの線描であるはずなのに D を伝えた。

手順は簡単に飲み込める。千瑛や斉藤さんの描く姿を見ていたので、方法は頭に入っていた。それほど複雑な操作は何もない。だが、ほかの誰が描いてもこうはならない。

絵を描き終えた湖山先生は筆を置いた。

「この二つの画題は、もう見たことがあったかな？」

僕があいまいにうなずくと、湖山先生は笑った。確かにどちらもしっかり見たことはなかった。

「では現物を見に行こう」

湖山先生は立ち上がり、僕もそれに続いた。相変わらず軽い足取りで、湖山先生は中庭に向かってスタスタと歩いていった。

サンダルを履いて初めて歩いた中庭は予想以上に広がった。西濱さんが手入れをしているところを見たことはあるが、実際に降りて歩いたことは一度もない。湖山先生はどうやらかなり機嫌がいいらしく、ときど

きふいに立ち止まり、なんでもない景色を数秒眺めてはまた歩き出す、ということを繰り返していた。庭の垣根の近くにある鉢に入った竹の前に立つと、こちらを振り返り、

「③ こういうのはどうだろう？」

と、嬉しそうに訊ねた。人の背丈とあまり変わらない細身の竹にいくつもの笹が付いていた。これまではそこにあつて漫然と通り過ぎていただけのただの笹竹も、湖山先生と並んで見るとやたらと立派な美術品のように見えた。僕は実物の竹を見ながら、水墨で描かれるお手本を透かしてその場所に見ていた。たぶん湖山先生もそれを問いたかったのだろう。僕は、

「複雑ですね」

と答えた。湖山先生はうなずいた。

「そのとおりだ。実際の竹は、描かれた竹ではない。多くのものは目に入り、それを楽しませてくれるが、それを人の手がすべて描くことはできない。あつちを見てごらん？ あちらはどうだろう」

湖山先生が指さした方向の先には、たくさんの葉を茂らせた大きな木があつた。幹は曲がりくねりごつごつとしていて、うっすらと苔が生えている。間違いなく湖山先生が指さしているのは梅の樹だ。こちらもありにも多くの葉や枝があり、何処をどう切り取っても、まとまりが生まれぬ。

「あれも難しそうですね。とてもじゃないけれど僕は描けない」

「そうだね。きっと私も描けない」

僕は驚いて湖山先生を見たが、湖山先生は笑ってから、うなずいてゆつくりと歩き出した。僕はその後ろを並ぶことなく付いていった。

(中略)

「いまは家の中に蛍光灯もあり、~~X~~光は停止しているけれど、こうして、庭に出て物の形を眺めていると気づかない間に、物の影や形は少しずつ変わっていつているのが分かる。現象を追い、描き始めて、物の形を追い、彩を追い、すべてを仕上げても、終わったときには、またすべてが変わっている。Y光は止まることなく動き続けているんだよ。水墨画という絵画が確立する過程で、きっと昔の人たちはそのことに気が付いたんだと私は思うよ」

「光は止まらない……時間が動き続けるといふことですか」

「そういうことだ。動き続け、刻々と変わり、姿を変え、形を変え、また現れる。それが自然というものだ。それを描くにはどうしたらいいのか、昔の人たちは考えたんだ」

「どうすればいいんですか？」

湖山先生は笑った。それからとても懐かしいものを見るように、僕を見た。

「今日、私は竹を教え、梅を教えた。今の君ならこの二つを簡単にものにしてしまうだろう。類いまれな観察眼と情熱を持つ君なら、この二つのお手本を自分一人でも習得してしまえるはずだ。君はたった一枚の絵からほかの人が学び取ることよりも、はるかに多くを感じ、たいせつなことにあつという間に気づいていく。だからこそ、私は君に気づいてほしいと思うことがある」

湖山先生は立ち上がり、数歩先にある小さな菊に手を伸ばした。何気なく咲いていた菊だった。

「青山君、これが君の先生だ」

湖山先生は僕に菊を手渡した。

「この菊に教えを請い、描いてみなさい。これは初心者の卒業画題であ

り、花卉画の根幹をなす技法がここに収められている。④私には伝えられないものがここにある」

背丈の低い白い菊は蕾と大きな花卉を付けていた。葉は色濃く強い。手渡された瞬間から、僕はこれをどう描くのかを考えていた。

「いいかい、青山君。絵は絵空事だよ」

僕は視線をあげて、湖山先生を見た。⑤湖山先生の目は笑ってはいなかった。

(一部内容を省略しました)

【砥上裕将『線は、僕を描く』】

注1 春蘭：「四君子」とも言われる、水墨画の重要な四つの基本画

題のひとつ目が「蘭」、次に竹・梅、最後に菊。

注2 虚脱感：全身の力がぬける感覚。

注3 斉藤君：水墨画家。完璧な技術を身につけている。後に登場する「千瑛」や「西濱さん」も湖山門下の水墨画家である。

問一 A C に当てはまる言葉を、次のア～エからそれぞれ選

びなさい。(同じ記号は二度使用しないこと)

ア やはり イ もちろん ウ まず

エ すぐに オ しかたなく カ もう

問二 線①「さらに強く脈打っていた」とありますが、その理由

として、最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 僕が描くことに疲労や虚脱感を覚えていいることに湖山先生は気づいていて、そのことを言い当てられると感じたため。

イ 湖山先生の評価を意識するあまり、穂先の震えをごまかすことしかできなかつたことをふいに恥ずかしく感じたため。

ウ たった一枚しか仕上げることのできなかつた僕の絵を見つめる湖山先生が無言でいるのが突然怖くなつてきたため。

エ 湖山先生に認めてほしいと全力で仕上げた僕の絵を見つめる湖山先生の真意がわからず、緊張がより高まつたため。

問三 線②「気が楽になりました」とありますが、「僕」がそのよう

に感じたのはどのようなことに気づいたからですか。最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 実物の特徴を丁寧に捉えるのではなく、想像して感じたままを描けばよいということ。

イ 実物そのものを描くのではなく、感覚で捉える中に水墨画の美しさがあるということ。

ウ 実物そのものは捉えられなくても、気楽に描くことで美しさは表現できるということ。

エ 美しい線を引くことができるようになれば、本能的に実物以上の絵を

描けるということ。

問四 D に当てはまる言葉を、次のア～エから選びなさい。

ア 湖山先生の技法のすばらしさ

イ 香りや際立つような白さ

ウ 圧倒的な梅の美しさ

エ 梅の花の繊細さ

問五 線③「こういうのはどうだろう?」とありますが、湖山先生は、

どのようなことを「僕」に気づかせようとしていたのですか。三十字以内で説明しなさい。

問六 線XとYの「光」の違いを四十字以内で説明しなさい。なお、

Xを「前者」、Yを「後者」とすること。

問七 線④「私には伝えられないものがここにある」とありますが、

このときの湖山先生の考えとして、最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 僕的水墨画に対する姿勢や情熱を認め、自分のお手本ではなく、絵とは何かを自然から感じ取ってほしいと考えた。

イ 自分自身的水墨画家としての衰えを感じ始め、意欲的に学び続ける僕にはもう教えられることが何もないと考えた。

ウ 類いまれな観察眼と情熱を持つ僕に自然本来の美しさを伝えるには、菊の花こそが唯一の画題であると考えた。

エ 僕の成長のはやさに圧倒され、自らの衰えを感じていたこともあり、卒業画題をすぐにでも渡したいと考えた。

問八 —— 線⑤ 「湖山先生の目は笑ってはいなかった。」とありますが、

この表現から読みとれる湖山先生の心情として最も適当なものを、

次のア～エから選びなさい。

ア 絵は現実を切り取ることではないと「僕」に強くうったえている。

イ 水墨画に対する「僕」の覚悟が本物であるかどうかを確認している。

ウ 自分自身の描き方を見いだしてほしいと「僕」に真剣に求めている。

エ 菊の花を描くことに迷いを感じている「僕」を心から励ましている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人類の歴史は感染症との戦いの歴史でもありません。

感染症は、病気を起こす小さな生物（病原体）が体内に侵入し、増えることで起こります。そして、病原体に感染した人、動物、昆虫などが他の生物と接触することで急速にカクダイし流行します。

病原体は人の目には見えないほど小さいため、人類は長い間、その原因を特定することができませんでした。そのため、感染症に対する有効な予防や治療を行えず、多くの人の命が失われました。十九世紀以降、世界中の学者によって感染症を引き起こす病原体が次々と発見されてきました。同時に、ワクチンの開発や抗生物質の発見により、予防法や治療法が急速に広まりました。二十世紀の後半には、A 人類にとって感染症が脅威であった時代は終わったと多くの人が考えていました。

ところが、近年、再び感染症の猛威が世界を襲っています。その原因として、いくつかの点が考えられます。一つ目は、新たな病原体の出現です。ある感染症に対して予防法が確立しても、それが効かない新たな病原体が次々と出現します。未知の感染症に対する予防法や治療法が見つかるまでには時間がかかり、その間に流行が広がってしまいます。二つ目は人口の過密化です。世界の総人口はこの五十年で二倍に増え、数年後には八十億人に迫る b イギオイです。都市部を中心に人口が集中すれば、感染症は広まりやすくなります。三つ目は急速に進むグローバル化です。ヒトやモノが地球全体でつながっていることで、ある地域で感染症が発生すると、またたく間に B が世界中に広まり、各地で感染症を引き起こします。

感染症の大流行を防ぐには、予防法や治療法の研究や実行だけでなく、

人類の社会の仕組みそのものを見直す必要があるかも知れません。

問一 ……線 a・b のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A に当てはまる言葉を、次のア～エから選びなさい。

ア まさに イ もはや

ウ やはり エ よもや

問三 ———線「予防法や治療法」の具体的な内容が書かれている一文を本文中からぬき出し、最初の五字を答えなさい。（句読点なども一字にふくみます）

問四 B に当てはまる三字の言葉を、本文中からぬき出しなさい。

問五 本文の内容として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 感染症はいつの時代も存在するため、人類と感染症との戦いは永遠に終わらない。

イ 人類は感染症に対する予防法や治療法を見つけたが、まだ十分に活用できていない。

ウ 人類の長い歴史の中で、感染症に対する有効な予防や治療ができた期間は短い。

エ 感染症は人間社会が生まれ出し、広めている病気であると考えなくてはならない。

問六 ———線「人類の社会の仕組みそのものを見直す必要」とありますが、具体的には、人類の社会の仕組みをどのように見直すことが感染症の流行を防ぐことにつながるとお考えですか。本文の内容をふまえて、次の(1)・(2)についてわかるように、あなたの意見を述べなさい。

(1) 具体的な見直しの内容。

(2) (1)のように見直すことが感染症の流行を防ぐ理由。

四 次の各問いに答えなさい。

問一 次の1～5にはそれぞれ一字ずつ漢字の誤りがあります。例にならって誤っている字をぬき出し、正しい字を答えなさい。

(例) この料理は以外と簡単だ。 [誤]以 ↓ [正]意

- 1 絶体絶命の危機から開放される。
- 2 学者として真理の追究に勤める。
- 3 児童を対照とした調査を行う。
- 4 安全保証の問題に関心を持つ。
- 5 蒸気機関車の模形を収集する。

問二 次の1～5について、例にならってAの意味を変えずに、Bの

() に当てはまるように書きかえなさい。

(例) A セミが大声で鳴く。

B (大声で鳴くセミ) の声が聞こえる。

1 A 父はあの曲が好きだ。

B () がラジオから流れて来た。

2 A 犬が私を追いかけた。

B () 私) は全速力で走って逃げた。

3 A 私は花屋でバラを買った。

B 母は () バラ) を花びんに活けた。

4 A 今日は空がとても青い。

B () 空) を写真にとる。

5 A 昨夜の大雪が道路を通れなくした。

B () 道路) を復旧する。

